

中間評価結果（公表様式）

5 5

大学名	帯広畜産大学
研究施設名	原虫病研究センター
拠点の名称	原虫病制圧に向けた国際的共同研究拠点
認定期間	平成 28 年 4 月 1 日～平成 34 年 3 月 31 日

1. 拠点の目的・概要

【目的・意義・必要性】

我が国で唯一の家畜原虫病に関する研究拠点として、大学、OIE などの国際機関ならびに関連省庁との研究連携により、人獣共通感染症としての原虫病および媒介節足動物の制圧と、家畜生産性向上による蛋白質資源の確保に努め、原虫病に関する研究を国際的に牽引することで、我が国は勿論、世界人類の健康福祉に学術貢献する。

【取組内容・期待される効果】

原虫病の制圧により人類の健康福祉に寄与するとともに、地球規模課題の食料安全保障に学術貢献するため、アジア初の OIE コラボレーティングセンターである当センターが、以下の研究を牽引する

- 1) 原虫病の診断、予防、治療に関する先端研究の推進
- 2) 原虫病と媒介節足動物の制圧および監視体制構築による国際貢献
- 3) 原虫病および媒介節足動物に関する研究者および専門家の育成

2. 総合評価

（評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待される。

（評価コメント）

家畜原虫病に関する唯一の共同利用・共同研究拠点として着実に成果を上げている。さらに、アジア及びアフリカから研究者を受け入れ、国際共同研究を進めており、成果が上がっている。今後も、拠点活動の更なる進展が期待される。

3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 国際的な連携により、共同利用・共同研究を展開し、着実に成果を上げている。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 多くの関連研究者を受入れ、幅広い機関の利用が進められている。ISO17025認定を受け、国際規格により試験所としての技術力が証明されている。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 成果論文が公表されているが、インパクトファクターの高い学術誌への発表が多いとは言えない。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 家畜原虫病に関する唯一の共同利用・共同研究拠点として、学会活動への貢献、ネットワークづくりなど、関連研究者コミュニティに貢献している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) インパクトファクターの高い学術誌に発表された成果論文が多いとは言えない。女性研究者に関しては、教授・准教授で採用がなされておらず、教員数の男女比に配慮した採用方針を検討することが望まれる。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 博士後期課程に留学生を受け入れるなど国際化に取り組んでいる。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 特色ある研究資源を生かした他の共同利用・共同研究拠点との連携等により、異分野融合研究の進展が期待される。

中間評価結果（公表様式）

56

大学名	筑波大学
研究施設名	つくば機能植物イノベーション研究センター遺伝子実験センター
拠点の名称	形質転換植物デザイン研究拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

1. 拠点の目的・概要

【目的・意義・必要性】

植物遺伝子に関する基礎科学の成果利用を促進する「形質転換植物に関する総合研究拠点」として、形質転換植物に関する学術研究を実施し、国際共同研究も含め実用化に繋げる応用研究推進を目的とする。

【取組内容・期待される効果】

形質転換先端技術、評価施設及び遺伝資源を活用し、植物重要形質発現に関わる遺伝子群の機能理解に関する国内外の共同研究及び実用化候補作物の作出につながる民間企業との共同研究を行う。

遺伝子組換え植物の社会受容に関わる情報発信活動及び遺伝資源に関するリスク評価・管理技術・知財管理・データベース等のノウハウについて、国内外の研究者コミュニティとの共用化を図るための拠点として機能する。

2. 総合評価

（評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待される。

（評価コメント）

形質転換植物に関する研究資源を共同利用に供し、国内外の研究者や民間企業との共同利用・共同研究により、優れた成果を上げている。

今後、組織再編後の体制を踏まえ、国際化や幅広い研究分野との融合による新分野創成に取り組むことが期待される。

3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 遺伝子組換え植物栽培研究設備など、形質転換植物デザイン研究に必要な施設・設備を共同利用に供しており、トマトの形質転換に関する研究などで成果を上げている。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 共同利用・共同研究の公募等を関連学会のウェブサイトを通じて行っており、採択課題の決定は学外者が半数以上を占める委員会で公平な審査を実施している。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 単為結果性トマトの開発など評価の高い成果が上がっているが、インパクトファクターの高い学術誌への論文発表が多いとは言えない。公開講座や公開講演会等による成果の発信は積極的に行われている。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 国際学術誌の編集等を通じて国内外の学協会の発展に貢献している。米国、フランス、ベトナム、タイなどの海外の機関との研究交流や企業との共同研究が活発である。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 研究成果の創出、外部資金の獲得、外国人研究者や若手研究者の採用、男女共同参画、年俸制の導入について改善に取り組んでいるが、十分とは言えず、改善が望まれる。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 組換え作物の圃場試験を通して企業や研究機関との連携を積極的に進めている。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 国際化や異分野融合研究の推進による拠点活動の活性化が期待される。
⑧組織再編に伴う拠点活動の状況
(評価コメント) 組織再編により、形質転換植物の開発から圃場における環境リスク評価まで幅広い研究分野をカバーできる体制が整っている。

中間評価結果（公表様式）

57

大学名	東京大学
研究施設名	大気海洋研究所
拠点の名称	大気海洋研究拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

1. 拠点の目的・概要

【目的・意義・必要性】

地球環境や生命の進化、気候変動に重要な役割を有する海洋と大気の基礎的研究を推進し、これらを統合し、人類と生命圏にとって重要な課題解決につながる研究を展開する。また、世界の気候海洋科学を先導する拠点として、国内外の共同利用・共同研究を推進し、次世代を担う海洋・大気・地球生命圏に関する豊かな科学的知識を備えた人材の育成を行う。

【取組内容・期待される効果】

大気海洋科学に関する研究拠点として、学術研究船、臨海実験施設、最先端分析機器、気候モデルを用いた共同研究を柱として、広く大気、海洋科学コミュニティを発展させていくとともに、これらの課題を国際的に展開し、大気海洋研究の国際的なハブ研究機関としての機能を強化していくことで、人類が抱える地球環境科学の課題を解明していく。

2. 総合評価

（評価区分）

S：拠点としての活動が活発に行われており、共同利用・共同研究を通じて特筆すべき成果や効果が見られ、関連コミュニティへの貢献も多大であったと判断される。

（評価コメント）

卓越した研究者が在籍し、大気・海洋分野における数多くの施設・設備を共同利用に供するとともに、参加者への支援の体制も充実しており、共同利用・共同研究拠点として十分に機能している。特に、外部資金の獲得実績に優れ、国内外の研究者との共同利用・共同研究を推進し、インパクトファクターの高い学術誌への論文発表も多い。

今後、女性研究者及び外国人研究者の登用や、関連研究機関や産業界との連携に努め、共同利用・共同研究拠点として一層の高度化と国際化に取り組むことが期待される。

3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 国内外に受賞歴のある卓越した研究者が複数在籍し、大気・海洋分野研究に必要な多くの施設・設備を共同利用に供している。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 共同利用・共同研究の公募等をウェブサイトを通して行い、採択課題の決定は学外者が半数以上を占める委員会で公平な審査が実施されている。また、「共同利用・共同研究推進センター」を設置し、参加者への支援体制を整えている。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 国内外の研究者との共同利用・共同研究の成果論文が、インパクトファクターの高い学術誌に数多く発表されている。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 多くの研究者に対して拠点の施設・設備の共同利用を促すことを通じて、国内外の学協会等の発展に貢献している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 外部資金の増加や海洋研究開発機構との連携強化に対応している。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 様々な面において大学の強み・特色としての機能強化に貢献しているが、女性研究者及び外国人研究者の登用や産業界との連携については、一層努力することが望まれる。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 大気・海洋分野における我が国最大の共同利用・共同研究拠点として、更に研究の高度化と国際化に取り組むことが期待される。

中間評価結果（公表様式）

58

大学名	京都大学
研究施設名	生態学研究センター
拠点の名称	生態学・生物多様性科学の先端的共同利用・共同研究拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

1. 拠点の目的・概要

【目的・意義・必要性】

我が国における生態学および関連学問分野唯一の拠点として、生態学・生物多様性科学の発展を望む研究者コミュニティの要望に応えるべく、本研究センターに集約された知識・技術・設備をもとに多様な共同研究を推進し、将来を担う研究者を育成することを目的とする。

【取組内容・期待される効果】

生態学・生物多様性科学の課題について、国内外の研究者に向けて共同研究、研究集会、ワークショップを募集・実施する。また、大型研究施設、研究サイト、研究資料の共同利用・研究を推進すると共に、ニュースレター、ホームページ等を通じて、生態学・生物多様性科学の国際的な発展に努める。

2. 総合評価

（評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待される。

（評価コメント）

生態学・生物多様性関連の各種計測器等を広く共同利用に供し、多様な共同利用・共同研究を支援している。また、拠点の規模と比較して共同利用・共同研究による成果論文数は多いことから、拠点として機能しており、今後の進展が期待される。

3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 安定同位体に係る各種計測器等を広く共同利用に供している。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 共同利用・共同研究の公募等をウェブサイトを通して行っており、採択課題の決定は、学外者が半数以上を占める委員会で公平に審査が実施されている。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 共同利用・共同研究による成果論文数は多く、インパクトファクターの高い学術誌に発表されたものもある。一般向けシンポジウムなどによる成果の発信も活発に行われている。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 日本学術会議のマスタープランにおける大型計画の策定等に関して関連分野の中心となっている。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 女性研究者の採用や運営委員会への参画など、一定の対応が認められる。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 研究成果を行政に必要なデータとして提供するなど、地域貢献を行っている。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 東アジアにおける生物多様性研究の拠点化に向け、国際ネットワークの形成を通じた、更なる国際化を進めており、今後の進展が期待される。

中間評価結果（公表様式）

59

大学名	京都大学
研究施設名	放射線生物研究センター
拠点の名称	放射線生物学の研究推進拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

1. 拠点の目的・概要

【目的・意義・必要性】

放射線生物学の先端研究や研究技術開発の推進のため、全国の関連研究者との共同研究を行うとともに、実験設備、研究資材や実験技術の供与などによる共同利用活動を行い、我が国の放射線生物学研究者コミュニティの研究拠点としての役割を担う。また当該分野の人材育成と先端的情報の発信源として機能するため、国際シンポジウム、研修会等を開催する。

【取組内容・期待される効果】

伝統ある我が国の放射線生物学の国際的リーダーシップの持続と次代の放射線生物学を担う人材の育成のため、①先端的研究成果の発表、②最新の実験資材・技術の共同開発と利用者への提供、③国際的な研究情報交換ならびに研究者交流、④次代の放射線生物学を担う人材育成プログラムの実施、を推進する。

2. 総合評価

（評価区分）

B：拠点としての活動は行われているものの拠点の規模等と比較して低調であり、作業部会からの助言や関連コミュニティからの意見等を踏まえた適切な取組が必要と判断される。

（評価コメント）

放射線生物学に関する患者由来の細胞コレクション等を共同利用に供し、拠点活動に当たっており、世界水準の研究成果も上げているが、十分とはいえない。

また、組織統合により、大学院生命科学研究科の附属施設とされ、大学としての教育研究の体制は整えられているものの、今後、共同利用・共同研究拠点としての活動を維持するためには、独立性に配慮した運営体制の見直しが望まれる。

3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 患者由来の細胞コレクションやデータベースなど優れた研究資源を有しており、技術職員、事務職員の支援体制も整えている
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 各種の共同利用システムを整備しているが、稼働率は高いとは言えない。運営委員会は、拠点の特性を踏まえ、民間や情報科学の専門家等の多様な人材も加えた構成が望まれる。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 放射線とゲノム維持機構の基礎的研究の成果論文がインパクトファクターの高い学術誌に発表されるなど、世界水準の研究成果も見られるが、十分であるとは言えない。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 「放射線生物研究連絡会議」を組織し、コミュニティの要望を聴取する体制を構築しているが、未利用者への発信を強化することが望まれる。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 学外の共同利用、共同研究者の増加を図るため、大型プロジェクトの核となって当該分野をさらに牽引することが望まれる。福島県立医科大学、大分大学などとのネットワーク形成については、顕著な進展は認められない。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 研究者の採用については、女性、外国人、若手人材の登用など人材の多様性の確保が望まれる。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 国際共同研究が行われておらず、外国人研究者が採用されていない点は改善することが望まれる。大学の組織再編により、大学院生命科学研究科の附属となり、大学としての教育研究の体制が整えられているが、共同利用・共同研究拠点としての活動を継続するためには、その独立性に配慮した運営体制の見直しが望まれる。

中間評価結果（公表様式）

60

大学名	京都大学
研究施設名	野生動物研究センター
拠点の名称	絶滅の危機に瀕する野生動物（大型哺乳類等）の保全に関する研究拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

1. 拠点の目的・概要

【目的・意義・必要性】

近年の人間活動によって、生物多様性は大幅に劣化している。これを克服するためには、生命の調和ある共存を見据えた学問の推進と、環境教育や普及活動の実践が求められている。本拠点は日本で唯一の野生動物研究の拠点となり、人間と野生動物の調和ある共存に貢献することを目的とする。

【取組内容・期待される効果】

次の4つの取り組みをおこなう。すなわち、1) 幸島観察所、屋久島観察所、熊本サンクチュアリ、遺伝子解析施設、野生動物遺伝資源データベースの共同利用、2) 公募課題による共同研究、3) 国内の連携動物園・水族館における研究と教育普及、4) 海外連携機関との国際共同教育研究である。これによって、野生動物研究の推進と国際レベルの人材育成に寄与する。

2. 総合評価

（評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待される。

（評価コメント）

日本各地の観察施設や野生動物遺伝資源データベースなど特色ある施設やデータを共同利用に供しており、国際的にも高水準の研究成果が上がっている。

今後、拠点の目的である絶滅の危機に瀕する野生動物の保全研究において、関連する研究活動との関係を明確化し、当該分野における国際的な拠点となることが期待される。

3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 日本各地の観察施設や野生動物遺伝資源データベースを共同利用に供し、共同利用・共同研究が活発に行われている。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 拠点のフィールドと施設の利用者は非常に多いが、学内と海外機関に利用者の偏りが見られる。遺伝資源データベースについては、動物園等との連携も生かした充実が期待される。今後の多様な展開も視野に入れ、運営委員会に女性を加えるなどの改善も望まれる。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 順調に論文を発表しており、インパクトファクターの高い学術誌へも発表されている。また、国際的な研究や学生・研究者の交流が活発であり、一般向けのセミナー等も開催されている。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 国内において動物園等との共同研究の拡大や、「野生動物遺伝資源データベース」の公開により、関連研究分野の発展に貢献している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 霊長類研究所との差別化について、拠点の方針を明確化し、特定の場所の特定の霊長類を対象とする研究の意義を具体的に示すことが望まれる。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 国際化や博士課程学生の教育等の面で貢献している。女性研究者の割合が高く、女性のセンター長の活躍は社会的意義が大きい。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 拠点の主たる目的である絶滅の危機に瀕する野生生物の保全研究において、食用飼育や動物園等との連携の位置付けを明確にすることが望まれる。また、国際ネットワークを積極的に形成し、共同利用・共同研究や人材交流を推進し、当該分野における国際的な拠点となることが期待される。

中間評価結果（公表様式）

6 1

大学名	京都大学
研究施設名	霊長類研究所
拠点の名称	霊長類学総合研究拠点
認定期間	平成 28 年 4 月 1 日～平成 34 年 3 月 31 日

1. 拠点の目的・概要

【目的・意義・必要性】

くらし・からだ・こころ・ゲノムの観点から「人間とは何か」を生物学的に解明することを目的として、霊長類に関する総合的研究を有機的・総合的に推進する。野生霊長類の観察や自然保護、あるいは飼育霊長類を対象とした実験的な研究や動物福祉の推進において、多様性の研究とともに保全の検討を早急におこなう必要がある。

【取組内容・期待される効果】

先進国ならびに発展途上国の研究者を受け入れて、国際的なプロジェクトを推進することにより、世界各国の霊長類研究者の共同研究拠点として機能することになる。また、海外の調査地において生物多様性の教育を行うことにより、地球的な枠組みでの生物保全の重要性を共有する。すなわち「地球社会の調和ある共存」を求める。

2. 総合評価

（評価区分）

S：拠点としての活動が活発に行われており、共同利用・共同研究を通じて特筆すべき成果や効果が見られ、関連コミュニティへの貢献も多大であったと判断される。

（評価コメント）

多くの教員による充実した支援体制の下、野外調査地や多種類の霊長類に関する飼育個体等を共同利用に供し、優れた成果を上げており、共同利用・共同研究拠点として十分に機能している。

今後、国際ネットワークを発展させ、国際的な共同利用・共同研究や人材交流を発展させることにより、異分野融合を推進することが期待される。

3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 野外調査地や霊長類の飼育個体、生体試料などを共同利用に供し、多くの研究課題が推進されている。共同利用・共同研究の支援のための多くの専任教員が配置されている。各種データベースを保有しており、利活用を促進するための方策の検討が望まれる。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 共同利用・共同研究の公募を関連学会のウェブサイト等を通じて行っており、採択課題の決定は公平な審査の下、実施されている。霊長類に対する分子生物学的な研究環境を提供することで産業界との共同研究も進んでいる。平成 28・29 年度の応募件数が減少傾向にあることの要因を把握することが望まれる。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 共同利用・共同研究の成果論文が学術誌に多く発表されている。また、海外との研究交流も活発に行われており、国際的に評価されている。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 「共同利用研究会」を設置して情報を共有し、シンポジウム等を通じて多様な研究分野の関連研究者コミュニティに貢献している。効果を一層高めるため、発信媒体について検討することが望まれる。
⑤審査（期末）評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 人獣共通感染症への予防対策について、適切に対応している。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 国際化、教育、企業との連携、地域活性化に貢献している。人材育成に関して、早い時期から独立した研究応募が可能な制度を設け、研究者の発掘と育成に努めている。 人材の多様性確保の観点から、女性研究者、外国人研究者及び若手研究者に関して、助教以上の登用を促進する努力が望まれる。また、クロスアポイントメント制度の活用については、積極的な進展が期待される。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 国際ネットワークを積極的に形成し、共同利用・共同研究や人材交流を発展させることで異分野融合の推進等を目指しており、引き続き、取組を進展させることが期待される。

中間評価結果（公表様式）

6 2

大学名	大阪大学
研究施設名	蛋白質研究所
拠点の名称	蛋白質研究共同利用・共同研究拠点
認定期間	平成 28 年 4 月 1 日～平成 34 年 3 月 31 日

1. 拠点の目的・概要

【目的・意義・必要性】

蛋白質科学分野における国際的な共同利用・共同研究拠点として、蛋白質の構造・機能研究とそれに基づく高次生命機能の研究を先導し、国内外の研究者に研究と交流の場を提供して共同研究を進め、蛋白質構造データバンクの運営等を行って蛋白質科学の振興をはかり、国内外の学生・若手研究者の育成を行うことを目的とする。

【取組内容・期待される効果】

世界最高級の性能をもつクライオ電子顕微鏡、超高磁場 NMR 装置、SPRING-8 ビームライン等の大型設備を共同利用に供し、国内外の研究者を受け入れて共同研究を推進する一方、国際シンポジウムの開催やデータベース構築により情報発信を行う。こうして多階層構造生命科学を創成し、世界の生命科学の発展に寄与する。

2. 総合評価

（評価区分）

B：拠点としての活動は行われているものの拠点の規模等と比較して低調であり、作業部会からの助言や関連コミュニティからの意見等を踏まえた適切な取組が必要と判断される。

（評価コメント）

蛋白質科学に関するデータや多くの設備を共同利用に供し、共同利用・共同研究の成果がインパクトファクターの高い学術誌に発表されている。

しかし、蛋白質に関する研究は全国の大学で活発に行われている状況であり、今後、蓄積された豊富な研究資源を活用し、研究機関としての優れた取組を維持しながら、その専門性を生かして、異分野融合研究の推進や国際ジョイントラボの形成に向けた更なる取組が期待される。

3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 蛋白質科学に関する大型の設備を共同利用に供し、構造データバンクの運営を行っている。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 共同利用・共同研究の公募は、関連学会のウェブサイト等を通じて行っており、国内外の多くの研究グループとの共同利用・共同研究が積極的に進められている。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) インパクトファクターの高い学術誌への論文発表は多い。毎年、国際シンポジウムを開催するなど、海外との研究交流が活発であるが、一般向けの講演会等が多いとは言えない。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 研究者を対象としたシンポジウム等の積極的な開催や、関連研究者コミュニティの意見を迅速に把握し、反映するために学協会との連携を図っている。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 運営委員会の学外委員を過半数以上とし、女性研究者数を増やしている。多様性確保の観点から、今後も女性研究者、外国人研究者及び若手研究者の採用に係る配慮が期待される。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 女性研究者の割合は、全体の三割程度と高いが、講師以上では各職位で一割程度に留まる。クロスアポイントメント制度の導入により外国人研究者を一名雇用している。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 拠点としての専門性を生かしつつ、異分野融合研究の推進や国際ジョイントラボの形成に向けた更なる取組が望まれる。

中間評価結果（公表様式）

63

大学名	鳥取大学
研究施設名	乾燥地研究センター
拠点の名称	乾燥地科学拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

1. 拠点の目的・概要

【目的・意義・必要性】

乾燥地科学研究に組織的に取り組む我が国唯一の教育・研究機関として、乾燥地における砂漠化や干ばつなどの諸問題に対処し、乾燥地における自然－社会系の持続性の維持・向上に資する研究を推進する。さらに、乾燥地科学分野の研究者の利用に供することを目的とする。

【取組内容・期待される効果】

特徴的かつ最先端の研究施設・設備等を利用した多様な共同研究を推進し、国際学術ネットワークの充実を通じて世界的な乾燥地研究拠点の形成を目指す。平成27年1月に設立された鳥取大学国際乾燥地研究教育機構等と連携し、学際的な乾燥地科学研究の発展に寄与する。

2. 総合評価

（評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待される。

（評価コメント）

乾燥地科学関連の施設・設備を共同利用に供し、「国内外の共同研究の推進」、「施設の共同利用」、「若手人材育成」、「ネットワーク形成と交流」及び「社会貢献活動」という五つの取組をバランスよく推進している。また、国際共同研究である砂漠化対策に関して成果を上げている。

今後、外部資金の獲得やインパクトファクターの高い学術誌への論文発表数等の課題について、具体的な目標を定めて取り組むことが望まれる。

3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 乾燥地科学に必要な施設・設備に加え、資源やデータベース等が整っており、共同利用・共同研究に関する支援体制も整っている。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 「国内外の共同研究の推進」、「施設の共同利用」、「若手人材育成」、「ネットワーク形成と交流」及び「社会貢献活動」という五つの取組をバランスよく推進している。今後、イノベーションにつながる民間との連携が期待される。また、ウェブサイト具体的な研究成果が記載されていないことや運営委員会の学外者の増加について改善することが望まれる。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 共同利用・共同研究を通じて優れた研究成果が生み出されているが、外部資金の獲得やインパクトファクターの高い学術誌への論文発表は多いとは言えない。公開講座や公開講演会等の実施状況は良好である。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 国内外のネットワーク構築や情報発信を積極的に行い、砂漠化対策に関する国際共同研究においても成果を上げている。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 研究者の質向上や本拠点での研究の比較優位性向上などの課題は、いずれも改善されつつある。外部資金の獲得については更なる改善が望まれる。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 鳥取大学国際乾燥地研究教育機構と連携し、国際乾燥地科学専攻に協力することなどにより、大学の機能強化に貢献している。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 外部資金の獲得やインパクトファクターの高い学術誌への論文発表数等の課題について、具体的な目標を定めて取り組むことが望まれる。

中間評価結果（公表様式）

64

大学名	岡山大学
研究施設名	資源植物科学研究所
拠点の名称	植物遺伝資源・ストレス科学研究拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

1. 拠点の目的・概要

【目的・意義・必要性】

地球環境の著しい悪化、地球規模での人口増加は、深刻な食糧不足を惹起しつつあり、安定した食糧生産のための品種改良が喫緊の課題となっている。本拠点では、国内外研究者との共同研究の推進により、「様々な環境ストレス下での食糧生産を可能にするため、資源植物の環境適応性の解明とその応用、および関連分野の人材育成」を目的とする。

【取組内容・期待される効果】

本拠点がこれまで蓄積してきた遺伝資源のゲノムデータ、環境応答データや植物の様々な生理応答に関する情報を広く共同利用、共同研究に供し、大学院生や若手研究者を積極的に受け入れ、グローバルに活躍する人材を育成しつつ、植物ストレス科学研究を推進する。これにより、植物科学分野の拡大発展と地球規模の課題である食糧問題解決に貢献する。

2. 総合評価

（評価区分）

B：拠点としての活動は行われているものの拠点の規模等と比較して低調であり、作業部会からの助言や関連コミュニティからの意見等を踏まえた適切な取組が必要と判断される。

（評価コメント）

卓越した研究者が在籍し、大麦・野生植物の種子分譲とデータベースの公開等による共同利用・共同研究を行っている。共同利用・共同研究による成果論文の中にはインパクトファクターの高い学術誌に発表したものもあるが、拠点としての活動が活発とは言えない。

今後、蓄積された豊富な研究資源を活用した共同利用・共同研究の展開に関し、拠点としての方向性を明確にするとともに、拠点活動の更なる活性化に向けた検討を行うことが望まれる。

3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 大麦・野生植物の種子分譲とデータベースの公開等を通じて、共同利用・共同研究を推進している。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 共同利用・共同研究の公募等に関してウェブサイトでの情報提供が充実しており、採択課題の決定は、学外者が半数以上を占める委員会で公平な審査が行われている。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 共同利用・共同研究による論文については、インパクトファクターの高い学術誌に発表されたものもあるが、特定の研究者によるものが大半である。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 大麦・野生植物の種子分譲等を通じて関連研究者コミュニティへの発展に貢献している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 大麦・野生植物以外の新イネ科モデル植物の変異株の収集を開始している。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 国際共同研究が多いとは言えず、国際化への貢献は低調である。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 拠点の中では質の高い研究が行われているが、蓄積された豊富な研究資源を活用した共同利用・共同研究の展開に関し、新分野創成、異分野融合などの方向性を明確にするとともに、拠点活動の更なる活性化に向けた検討を行うことが望まれる。

中間評価結果（公表様式）

65

大学名	愛媛大学
研究施設名	沿岸環境科学研究センター
拠点の名称	化学汚染・沿岸環境研究拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

1. 拠点の目的・概要

【目的・意義・必要性】

生物環境試料バンク（es-BANK）及び先端研究設備等を共同利用・共同研究施設として機能化し、世界各所から収集した試料の有効利用を体系化するとともに、環境科学関連分野の一層の発展に寄与することを目的とする。

【取組内容・期待される効果】

es-BANKに冷凍保存された試料の共同利用化をすすめ、国際共同研究を戦略的に推進する。併せて、有害化学物質分析装置・毒性解析装置等を共同利用・共同研究機器として整備し、学際的共同研究を強化する。さらに研究者派遣や留学生の受け入れ等の交流により、世界をリードする最先端共同研究拠点の形成が期待できる。

2. 総合評価

（評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待される。

（評価コメント）

冷凍保存された貴重な生物試料等を共同利用に供し、化学汚染や沿岸環境研究の推進により、成果論文数が増加していることなど今後の展開が期待できる。

今後、人材の多様性の確保に向けて取り組むことが望まれる。

3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 環境科学分野の拠点として、化学汚染や沿岸環境研究の推進を担っており、海に面した大学の立地を生かしたユニークな拠点である。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 生物環境試料バンク (es-BANK) は海外の研究機関も含め幅広く利用されており、学術的にも環境政策分野における貢献は大きい。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 成果論文数は増加傾向にある。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 国際共同研究により、外国人研究者の人材育成に貢献している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 女性研究者の割合が多いとは言えず、今後、積極的な改善が望まれる。

中間評価結果（公表様式）

66

大学名	琉球大学
研究施設名	熱帯生物圏研究センター
拠点の名称	熱帯生物圏における先端的環境生命科学共同研究拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

1. 拠点の目的・概要

【目的・意義・必要性】

亜熱帯域に立地する唯一の共同利用・共同研究拠点としてフィールド研究を軸に、熱帯・亜熱帯島嶼域において、サンゴ礁、マングローブ林、熱帯・亜熱帯雨林等、熱帯・亜熱帯に特徴的な生態系で、生物多様性、気候変動への生物と生態系の反応、遺伝資源、共生現象等に関する共同研究を、国内外の研究者と推進することを目的とする。

【取組内容・期待される効果】

亜熱帯の自然を活かしたフィールド研究を軸に、熱帯・亜熱帯の高い生物多様性の形成・維持機構と、人為的環境変化が熱帯・亜熱帯に特有なサンゴ礁、マングローブ林、森林等の生物や生態系に及ぼす影響等に関わる共同研究を遂行する。これにより、熱帯生物圏研究の発展に寄与し、気候変動下における生物多様性の保全や利活用に貢献する。

2. 総合評価

（評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待される。

（評価コメント）

亜熱帯気候帯に立地する施設やフィールドを共同利用に供し、専任教職員等を配置して熱帯生物圏における生物多様性等に関する研究を支援しており、インパクトファクターの高い学術誌に論文を発表している。

一方で、サンゴ礁研究に成果が偏っており、陸域生態系や人間の生命現象などの分野の進展に工夫が望まれる。

今後、亜熱帯気候帯に立地し、固有種に富んだフィールド研究を行うユニークな拠点として、国際共同研究や国際貢献に取り組むことが期待される。

3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 亜熱帯気候帯に立地する特色を生かして、熱帯圏生物学に関連する共同利用・共同研究を展開している。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 沖縄本島中央の西原施設・分子生命科学施設と、本島北部の瀬底施設、さらには西表島の施設という四施設間の連携の改善が図られている。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 研究成果論文数は増加傾向にあり、インパクトファクターの高い学術誌への論文発表も行われている。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 沖縄本島から西表島まで南西諸島を広くカバーするユニークな拠点活動により、関連研究分野に貢献している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 科研費の獲得強化、大学院生の受入れ数の増加、インパクトファクターの高い学術誌への論文発表が進展している。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 大学の立地条件を生かしたユニークな研究活動により、大学の機能強化に貢献している。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 亜熱帯気候帯に立地し、固有種に富んだフィールド研究を行うユニークな拠点として、国際共同研究や国際貢献を推進することが期待される。